

今年10月には、「持続可能な開発のための生物多様性」をテーマに、韓国のピョンチャンにおいて生物多様性条約第12回締約国会議(COP12)が開催されます。

わが国でも、愛知目標の達成に向けて様々な主体が生物多様性の主流化に取り組んでいます。

本号では、「ゼニタナゴ」の現状と復活への課題を紹介します。また、企業と生物多様性セミナーの開催結果についても報告します。

—ノ宮町海岸

気がつけば絶滅種？

かつての普通種「ゼニタナゴ」の悲劇



図1 ゼニタナゴのオス(上)とメス(下)。メスの総排泄口から伸びているのは産卵管で、この管を二枚貝に挿入し、産卵する。

●千葉県に生息するタナゴ類

皆さんは「タナゴ」という魚をご存知ですか。

タナゴはドブガイなどの二枚貝類に産卵する習性を持つコイ科の淡水魚類で、県内ではミヤコタナゴ、ヤリタナゴ、タナゴ、アカヒレタビラ、ゼニタナゴ、カネヒラ、タイリクバラタナゴ、オオタナゴの8種が確認されています。しかし、このうちカネヒラは琵琶湖から入ってきた「国内外来種」、タイリクバラタナゴとオオタナゴの2種類は中国から入ってきた「国外外来種」であり、在来種の5種についてはすべて減少傾向にあります。その中でも、特に個体数が減少している(あるいは絶滅している)種がゼニタナゴです。

●ゼニタナゴとは

ゼニタナゴは、かつては関東地方から東北地方まで広域に生息していた体長8cm程度のタナゴの仲間です(図1)。タナゴ類の多くは春に産卵を行いますが、ゼニタナゴは秋に産卵する珍

CONTENTS

| | | |
|---|----------------------------|---|
| 1 | 気がつけば絶滅種？かつての普通種「ゼニタナゴ」の悲劇 | 1 |
| 2 | 「第11回企業と生物多様性セミナー」を開催しました | 3 |
| 3 | 地域文化と動植物(⑤落花生) | 3 |
| 4 | 千葉県の外来種(セアカゴケグモ) | 4 |

しい習性を持っています。

県内では、かつてゼニタナゴは印旛沼や手賀沼などに多く生息していました(図2)。特に、手賀沼ではゼニタナゴは1950年代まではタナゴ類の中で最も多く獲れた魚でしたが、食用に適さないことから畑の肥料にされていたこともあったそうです。しかしながら、それだけ多く確認されていたゼニタナゴは、1980年代以降は両沼で共にその記録が途絶えてしまいました。



図2 かつてゼニタナゴが多く生息していた印旛沼

●なぜタナゴ類が減少したのか

それでは、なぜ、ゼニタナゴを始めとしたタナゴ類が減少してしまったのでしょうか?その原因として、大きく3つの問題が挙げられます。

1つ目は、肉食性外来魚であるオオクチバス(ブラックバス)やブルーギルの増加による影響が考えられます。オオクチバスやブルーギルが増加した1980年代は、ちょうどタナゴ類の多くが印旛沼や手賀沼から姿を消した時期と一致しています。

2つ目には、タナゴ類の産卵習性が深く関係しています。タナゴ類は二枚貝類に産卵するため、貝がいなければ子孫を残すことができません。一方、二枚貝類は環境の変化に弱いため、コンクリート護岸などへの環境改変、水質の悪化(富栄養化)やヘドロの堆積などの影響を受けやすく、急激にその数を減らしてしまいました。つまり、私たちの生活が便利になったことにより、二枚貝類に悪い影響を及ぼしてしまったのです。

3つ目には、タナゴ類は観賞用としても好まれるため、心ない愛好家などに大量に捕獲されてし

まったことが挙げられます。

特に、ゼニタナゴは印旛沼や手賀沼などの池沼に生息していた種であるため、オオクチバスなどの外来種の影響や水質の悪化による影響を強く受けたことが考えられます。これらの影響により、かつての一大生息地であった印旛沼や手賀沼では、現在、その姿を見ることができなくなっていました。

●どうすればゼニタナゴを復活できるのか?

このように急激に数を減らしてしまったゼニタナゴを復活させることはできないのでしょうか?絶滅あるいはその危機に直面している種を復活させるための手法として、生息域外保全(施設等において種の保存を行うこと)されていた個体をかつての生息地などに再び放流(導入)する、「再導入」があります。千葉県的事例ではありませんが、他県では生息域外保全されていたゼニタナゴをかつての生息地に復活させるために、野外の実験池においてゼニタナゴの再導入試験を行い、野外に戻した際にゼニタナゴが生き残れるかを調査しています。これらの成果を参考とすれば、千葉県でもゼニタナゴをかつての生息地に再導入し、復活させることができる可能性があります。

しかしながら、現実的には、県内で長らく生息が確認されていないゼニタナゴを見つけ出すことは非常に難しい状況にあります。そのため、ゼニタナゴを復活させるためには、利根川水系などに生息していたゼニタナゴの子孫を入手し、それらを試験的に再導入するという方法が現実的かもしれませぬ。

●タナゴ類を守るには

ゼニタナゴの事例からも分かるように、タナゴ類を守るためには、タナゴ類そのものが生息できる環境を守ることだけでなく、二枚貝類の生息環境を守ることが必要不可欠です。そのためには、池沼の水質浄化や底質の環境改善などにも取り組んでいくことが重要です。

また、きれいな色をしているタナゴ類は古くから釣りや観賞用として好まれてきましたが、タナ

ゴが減っている状況を考えて、むやみに採集し持ち帰ることは控えてもらわなければなりません。加えて、地域の遺伝的特性を守るためにも、他の地域で採ってきたタナゴを放流することは同様に控えてもらわなければなりません。皆さんが正しい認識を持って取り組むことが、タナゴと一緒に生息している他の種を守ることにもつながるとともに、そのような取組の一つ一つが、「地域の生物多様性の保全」につながるのです。

(鈴木 規慈 千葉県生物多様性センター)

「第11回企業と生物多様性セミナー」を開催しました

生物多様性の保全と持続可能な利用のためには、企業の事業活動においても多様な主体との連携・協働のもと、生物多様性への取組が必要不可欠です。

このため県では、企業の取組を支援する活動の一環として、千葉県内の生物多様性に関する情報や先進的な企業による取組事例などの情報共有を行うための「企業と生物多様性セミナー」を平成21年度から開催しています。

本年度第1回目のセミナーは、9月12日に千葉市内の東京情報大学千葉ステーションキャンパスにおいて開催されました。

(株)東芝の藤枝一也氏をお招きし、「工場を中心とした生態系ネットワークと希少な動植物の生息域外保全」と題した講演をしていただきました。また、県生物多様性センターの萩野康則副主幹から「千葉県レッドデータブック」の概要を説明しました。



(株)東芝の藤枝一也氏による講演

(鈴木 芳博 千葉県生物多様性センター)

地域文化と動植物 (⑤落花生)

花が咲き終わると花莖が地中にもぐり実をつける「落花生」。千葉と言えば落花生といわれるように、千葉県の落花生の生産量は、全国の約70%を占め日本一です。特に、千葉、印旛、海匝、山武、君津地域などが代表的な産地です。

しかし、落花生はもともとこの地域で栽培されていたわけではありません。原産地は南アメリカとされており、日本へは18世紀初め頃に伝来したとされています。本格的な栽培が始まったのは明治に入ってからのものであり、普及するまでには多くの困難があったようです。

そのような中、落花生の普及に努めた一人に、鎌数村(現旭市)の名主金谷総蔵(1848～92年)が挙げられます。金谷総蔵は、県が奨励する落花生を自邸内で試作し、落花生が千葉県気候風土や土壌に適していることを確認すると近隣の農民一人一人を説得して栽培を奨励し、落花生の栽培普及に努めたとされています。これら先人の努力によって千葉県産の落花生は特産品として不動の地位を築くことができました。



金谷総蔵を称える「落花生の碑」(旭市 伊勢大神宮境内)

晩秋から初冬に、県内最大の落花生産地である八街市など北総台地では、落花生畑に高さ1.5m、直径1mほどの茶色の積み上げた小山が幾つも並んでいます。この風景は、郷愁を誘う千葉ならではのものです。

この茶色の小山を「ぼっち」と呼び、落花生を

北風に当て、1か月ほど乾燥させることにより、実の苦味が抜け、甘味と油がのるそうです。

この風景は、文化庁にて行われた、「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究」において、山武杉の防風林とともに、八街市周辺の特徴的な農村風景として確認されており、落花生産地の晩秋から初冬にかけての風物詩になっています。

この郷愁あふれる農村の原風景をいつまでも残してほしいものです。



落花生畑の「ぼっち」(八街市)
(鈴木 芳博 千葉県生物多様性センター)

いのち 生命のにぎわい調査団 団員募集

千葉県内の生物多様性を知るために、身近な生きものの調査報告を行う団員を募集しています。

地域にいる身近な生きものの報告を、県内の生息分布図等にまとめています。調査対象は、発見報告と季節報告で全57種です。

また、団員向けに、生きものの見分け方の研修として、年2回観察会を開催し、団通信を年4回発行しています。(団員数：平成25年12月現在886名)

対象：小学生以上

(自然観察、生物調査に関心のある方)

応募方法：

県生物多様性センター・生命のにぎわい調査団のホームページから「入団申込書」をダウンロードし必要事項を記入して郵送(ファックス送付可 FAX：043-265-3615)

<http://www.bdcchiba.jp/monitor/nigiwai.html>

受付期間：随時

問い合わせ・入団申込書の送付先

下記の千葉県生物多様性センターまで

Email：monitor@bdcchiba.jp

千葉県の外来種

セアカゴケグモ



写真1

写真2

撮影 奥山 清市

かつて日本には毒グモはいませんでした。しかし1995年に大阪でゴケグモ類の1種であるセアカゴケグモが発見され、大騒ぎになりました。ゴケグモ類はヒメグモ科ゴケグモ属に含まれるクモで、南北アメリカやオーストラリアを中心に約30種が知られており、毒グモとして有名なグループです。セアカゴケグモはオーストラリア原産で、船の積荷に紛れて侵入したものと考えられています。毒性が強いとされ、海外では死亡例もあるため、特定外来生物に指定されています。全国各地で発見が続き、2013年9月にはついに千葉県でも確認されました。2013年10月現在、全国の30府県で見つかっており、東海・関西・四国・九州のいくつかの府県で定着しています。

セアカゴケグモは毒グモという言葉から連想される、毛むくじらの大きなクモではなく、腹部が丸くて脚が細長い、体長1cm程度の小型のクモです。成熟した雌は体全体が濃褐色から黒色で、腹部の背中側に縦長の赤い斑紋があります(写真1)。また、腹部の腹側には砂時計型の赤い模様があります(写真2)。この砂時計模様はゴケグモ属に共通の特徴で、他のクモにはありませんので、ゴケグモ類であることを確認する際に、最も有効なポイントとなります。

日当たりの良い場所の地面近くのすき間や隅、例えば側溝の中やエアコン室外機の裏のようなところに、不規則で立体的な網を張ります。攻撃性の弱いクモなので、クモから襲いかかってくることはありませんが、手でつまんだりすると咬まれることがあるので絶対に素手で触らないでください。日本国内でも咬傷事故が増えており、特に野外に置いた履き物の中に潜んでいたのに気付かずに、足を咬まれるケースが目立ちます。幸い今のところ重症化した例はありませんが、人によってはショック症状を起こし、重篤になることも考えられますので、油断は禁物です。もしセアカゴケグモを発見されたら、発見場所を所管する保健所へ連絡してください。

(萩野 康則 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No.36 平成26年1月31日発行

編集・発行 千葉県 生物多様性センター(環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2 (千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <http://www.bdcchiba.jp/index.html>